

## 論文審査の結果の要旨

氏名： 伊 藤 景

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：「石ノ森章太郎——一九六〇年代作品を中心として——」

審査委員：（主査）教授 上 田 薫

（副査）教授 山 下 聖 美 講師 清 水 正

日本のマンガに関する学術的研究は、戦前戦中のマンガを対象とする政治学的研究や、映画表現との相互的影響を論ずる芸術学的研究、また日韓やその他諸外国のマンガとの比較研究、更に戦後マンガの第一人者手塚治虫を対象とする研究などが既に若干存在する。しかし、そうした研究の中に、手塚後の第二世代と目され個人として刊行されたコミックの世界記録を持つ石ノ森章太郎を対象とする学術論文は極めて少ない。単行本で刊行された研究書も、笠原博『石ノ森章太郎マンガの魅力』（1978年）と山田夏樹『石ノ森章太郎論』（2016年）の二冊があるのみであり、石ノ森章太郎研究をテーマとする博士論文は一つも無い。こうした研究状況を踏まえ、伊藤景氏は本研究において、石ノ森章太郎を戦後マンガ表現における革新者としてマンガ史の中に位置付けること、更にまた石ノ森章太郎研究を通じて、手塚治虫によって代表される戦後マンガ史の再構築を目指している。

論文の構成は石ノ森章太郎の作品の中から1960年代の作品を中心に第一章・処女作「二級天使」-マンガ演出の創造-、第二章・「マンガ家入門」-マンガ技法の言語化-、第三章・「龍神沼」-変貌する少女マンガ-、第四章・「サイボーグ 009」-新たな時代とグローバルマンガの始動-、第五章・「ジュン」-手塚治虫からの脱却-、第六章・「人造人間キカイダー」-ロボットと人間の新たな関係-、終章となっている。第一章では処女作「二級天使」が掲載誌「漫画少年」廃刊の経緯とともに論じられ、デビュー作であるにも関わらず多様な手法の試行の跡が認められること、ディズニータンアニメーション「ピーターパン」からの影響や、キャロル・リード監督映画「第三の男」からの影響が顕著であることなどが指摘されている。その上で、デビュー作において既に、晩年到達した萬画という石ノ森独自の創作理念の萌芽が見られることを示唆している。次の第二章では二十七歳の若さで書かれた「マンガ家入門」を取り上げている。この作品は出版社秋田書店の求めに応じて執筆されたものであるが、自作の「龍神沼」を題材として後進マンガ家育成のために書かれた当作品が、マンガ家入門書として多くのマンガ家志望の青少年に広く読まれ、特に竹宮恵子、大島弓子、萩尾望都、水野英子、里中満智子など、後に日本を代表する少女マンガ家たちに多大の影響を与えたとしている。更には自作「龍神沼」が「マンガ家入門」の実作例として取り上げられているが、創作手法の説明が論理的・分析的で、石ノ森が単に天才的な作家だけでなく、論理的・分析的に創作手法を把握していた点を詳しく論じている。また第二章においては、石ノ森の作家としての多面性を、商業的成功を第一とする「マンガ作家」、商業的成功を度外視し作品の完成度を追求する「マンガ作者」の二つの型に分けて論じる手法を導入している。第三章は早世した姉への思慕が色濃く描き出されている「龍神沼」を取り上げている。「龍神沼」には先行する短編「龍神沼の少女」があり、共通するモチーフの改作と言えるが、ここで石ノ森は「マンガ作者」として、純粋な創作衝動の肯定や、表現技法の試行に挑んでいる。第三章は「龍神沼」の解説に留まらず、姉由恵と石ノ森との関係性や姉由恵の死のエピソードを通じて、流行マンガ家として揺るぎない基盤を築きながらも「マンガ作者」として創作を続ける石ノ森の作家像が克明に描き出されている。第四章の「サイボーグ 009」では「マンガ作家」としての側面が論じられるが、それが姉の死後、1961年に単独渡航した世界一周旅行の産物であること、またそれは石ノ森がマンガ家として「マンガ作家」の側面を改めて肯定的に受け入れた成果であると論じている。「サイボーグ 009」はテレビアニメーション化を通して、実質的に石ノ森を広く世に知らしめた作品と言えるが、上記のような紆余曲折を経て、所謂石ノ森ワールドと後に呼ばれる世界観を遺憾なく発揮した作品である。ここで、石ノ森はSF的な最先端のイメージを躊躇することなく導入し、国民的な人気を勝ち得たことが論じられている。第五章は「ジュン」-手塚治虫からの脱却-と記されている。ストーリーの解説やセリフの殆ど無い「ジュン」は、石ノ森の手塚治虫への崇敬の念から生み

出された作品とも言えるが、それは結果的に手塚と石ノ森の世界観の違いを決定的にした作品として取り上げられている。読者からの手紙をきっかけに手塚・石ノ森両者の関係が破綻することになるが、それは石ノ森の手塚とは決定的に異なるマンガ創作思想が鮮明に打ち出される契機ともなったと言える。石ノ森は手塚との騒動をきっかけとして、手塚の確立した戦後マンガからの脱却に着手し、新たなマンガ表現を開拓してゆく。その試みは「ジュン」では完全に果たされなかったが、この方向性は萬画宣言にも通ずるものであり、次世代のマンガ表現を先取りするものであったことを伊藤氏は示唆する。第六章は「人造人間キカイダー」を取り上げているが、この作品のみ70年代作品となるが、テレビシリーズの「仮面ライダー」や「秘密戦隊ゴレンジャー」の原作者として知られる石ノ森のメディアミックス的創作の領域と、石ノ森の思想についての言及が為される。「人造人間キカイダー」は現代社会が直面しているAIと人間との関係性や共存などの問題を先取りした作品と言え、伊藤氏は石ノ森が「人造人間キカイダー」執筆当時知りえたロボットの知識を、チャペック「ロボット(R.U.R)」、バリントン・J・ベイリー「ロボットの魂」、リラダン「未来のイブ」などを参照しながら、石ノ森が近未来のロボットに対して独自の解釈、即ち人間の定義の揺らぎという新しい解釈を与えている点を指摘している。「人造人間キカイダー」は「仮面ライダー」程世上の人気を博しえなかったが、従来より作品としての評価は高く、マンガが単に娯楽として消費されるものではなく、言わば哲学的懐疑の器としても機能し得ることを予感させた作品と言える。

以上のような構成による論考は、最後に石ノ森の「萬画宣言」との関係性において、石ノ森が戦後マンガ表現の革新者として果たした役割を、包括的、かつ十分に論じ得ていると言える。石ノ森が晩年に説いた「萬画宣言」とは、マンガは手塚治虫のように確立した世界観やセオリーの下で構想されるものではなく、無限にその可能性を拡張してゆく「萬画」として発展しうることを宣言したものだと言っているが、論考を通じてその主張は十分に首肯し得る。ただ、論考の随所に文章表現的な稚拙さが目立ち、また原作のカットの分析に用いられている心理分析などは、根拠が明確ではない部分もあり、独断的解釈と受け止められかねない。そうした推論の不用意さが、論考全体の厳密さを損ねているように思われるが、博士論文としては初めての試みとなる石ノ森章太郎研究は、この論文をもって緒に就いたと言えよう。知名度に比して正当な評価を与えられることの少なかった石ノ森章太郎の著作を網羅的に論及し、手塚治虫的マンガ造形とは異なる多様なマンガ表現の可能性を開いた石ノ森のマンガ史的な位置付けに本論考は成功している。余りにも著名であり、現在においてもテレビ版「仮面ライダー」の原作者として知られている石ノ森章太郎であるが、戦後マンガ史において果たした比類なき功績については、これまで余りにも言及されることが少なかった。様々な領域において、一世を風靡して消え去っていった作家は数知れず存在しているが、伊藤氏の研究がなければ石ノ森章太郎も正当な評価がなされることなく人々の記憶から消え去っていたかもしれない。今日日本を代表する文化・芸術にまで成長したマンガについての研究は、従来伝統芸能が日本を代表する文化・芸術として諸学の研究対象とされてきたように、多様な方法論を駆使して本格的に研究・解明されるべき対象と言える。マンガ研究の意義が広く社会に受け入れられつつある時代に、いち早く戦後マンガ草創期を背負った石ノ森章太郎を研究の俎上にあげた意義は極めて大きいと言える。

上記により、本論文は博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和2年2月3日